

早稲田商学第 435 号
2013 年 3 月

消 息

原輝史先生追悼セミナーに参加して

本学名誉教授 原 輝史 先生が逝去されてから一年有余が経った。わが国のフランス経済史研究をリードされ、本学の発展にも多大な寄与をされた原先生については、一周忌を迎えた2012年の夏にも哀惜の声が絶えることはなかった。なかでも2012年8月にパリで開催された欧州経営史学会（EBHA）・日本経営史学会（JBHS）の合同国際大会に接続して、標記の原輝史先生を偲ぶセミナーが内外の研究者を集めて当地で開催されたことは重要である。以下は一参加者の立場からこのセミナーの内容を紹介する小文である。

このセミナーは原先生が在学したパリ第4大学のローラン・ムーニエ研究センター（CRM）、同じく原先生が長らく日仏交流の拠点とされた社会科学高等研究院（EHESS）の歴史研究センター（CRH）の後援を得て、これまた原先生がパリ滞在に愛用されたシュジェール館（Maison Suger）で2012年8月29日におこなわれた。セミナー呼びかけの労をとられたのは原先生の旧友おふたり、ドミニク・バルジョ（Dominique Barjot）パリ第4大学教授およびパトリック・フリダンソン（Patrick Fridenson）EHESS 主任研究員（教授）である。セミナーには原先生ご令閨・原 尚様も臨席され、朝10時から夕刻18時過ぎまで、昼食をはさんでまる一日かけて原先生の遺徳を偲ぶ人々が報告と討論に参加した。

セミナーはまず、原先生の恩師にあたるフランソワ・キャロン（François Caron）パリ第4大学名誉教授の基調報告からはじまった。原先生の遺影とさりげなく捧げられたお花を前に、このフランス経済史研究の大御所は「原輝史の人と学問」と題する長大な報告をおこなった。キャロン氏の報告は、故人を偲ぶだけでなく原先生が生きた時代のフランス経済史研究を原先生の業績を視点において総括するという本格的なものとなり、高齢のキャロン教授の朗々たる大報告に参加者一同が思わず襟を正した。なおこのキャロン氏の報告は後日、原先生の門下生でもあった市川文彦氏（関西学院大学・本

学商学部卒)の手によって邦訳・発表される予定である。

続いてセミナーは第一部「カルテルと産業政策の研究者としての原輝史」に入り、前述のバルジョ氏、および原先生と交流の篤かった中島俊克氏(立教大学)がそれぞれフランスのカルテル形成史とパリ機械工業のケースをとりあげた報告をおこなった。フランスの産業史というジャンルはセミナー主催者のひとりであるバルジョ教授が手がけられ、原先生が発展させたものであるが、その潮流を汲むひとりが中島氏である。中島氏はまた、原先生が生前に強調されたフランス経済のカルテル(アンタント)体質にも言及され、原先生の着想が今日の国際的な研究水準に継承されていることを示して一同に感銘を与えた。続いてフランス側からフロランス・アシェールロワ(Florence Hachez-Leroy)氏(EHESS-CRH)が報告をおこなった。通常フランス人は国際会議でもフランス語で通すものであるが、当日アシェ氏はご令閨の前にまず英語で原先生の思い出を語り、自身が院生時代に国際会議にデビューした際に原先生が励ましてくれたこと、無名だった時代にも原先生がいつも気にかけてくれたことを丁寧にお話された。筆者はこのアシェールロワ氏が花のような女子学生だった頃からよく存じ上げているが、原先生のエピソードははじめて聞くものであり、アシェールロワ氏の細やかな礼節とともに心打たれた次第である。アシェールロワ氏の報告のあとに筆者が原先生の学問形成について短い報告をおこなった。昼食は会場のシュジュール館で主催者の心配りから上質のワインが振舞われフランス料理を囲んでしばし故人を偲ぶ会が持たれた。

午後のセミナーは第二部「交通の歴史家としての原輝史」に入り、前述の市川教授が19世紀の運河政策、ミシェル・メルジェ(Michèle Merger)氏(CNRS)がイタリアの高速鉄道にかんする報告をおこなった。市川氏はフランスの交通史のなかでこれまで閑却されてきた船運交通に着目され、「第一次交通革命」「第二次交通革命」の概念も提唱された。メルジェ氏は近年業務と組織の革新が著しいイタリアの新幹線事業について新鮮な情報をもたらされた。交通は原先生の十八番のテーマでもあり、闊達な討論に原先生の学問の息吹を実感したのは筆者だけではなかったろう。

休憩ののち、セミナー最後のセッションである第三部「企業と国際統合過程の歴史家としての原輝史」が幕を開けた。前述のフリダンソン教授の司会のもと、橘川武雄氏(一橋大学)、ローラン・ティッソ(Laurent Tissot)氏(ヌシャテル大学)、ピエール・ランティエ(Pierre Lanthier)氏(ケベック大学)が、それぞれ日本の電力エネルギー産

業、日本・スイスの通商関係史、フランスの電機産業について本格的な報告をされた。ディスカッションには湯沢威氏（学習院大学）、マティアス・キッピング（Matthias Kipping）氏（トロント・ヨーク大学）という、日欧の経営史学会の大御所も加わり、経営モデルの統合過程におけるアメリカナイゼーションの捉え方等の論題をめぐって白熱した討論が閉会時間を過ぎても続けられた。それはまた原先生が生涯をかけて格闘されたテーマでもあった。

セミナーの終盤になり、さきのキャロン教授が総括コメントをされた。ある種の儀礼的な閉会あいさつと思いきや、キャロン先生のコメントは当日のセッションのすべての報告・すべての発言を吟味する長大なものとなり、そのよどみない展開に一同はふたたび圧倒された。最後に原先生の旧友でもあったフリダソン教授が故人の思い出を語った。フリダソン氏の来日時の思い出、「日本を知るには何を読めばよいか」と問うたフリダソン氏に原先生が司馬遼太郎を推したエピソード、別邸で自然をこよなく愛された原先生の素顔、ゼミ学生に愛情をもって接した原先生の教育——尽きることのない思い出の最後に、フリダソン氏は原先生がゼミのサイトに書いておられたという警句を引用された。「何のために歴史を学ぶか。それは、真実を明らかにするためである」——。静かな感銘の余韻のなか、ご令閨・原 尚様の感謝の言葉とともにセミナーは閉じられ、参加者は夕闇のパリに散った。原先生のご冥福をお祈りしつつ、その業績に学ぶ意義を新たに思い起こさせたセミナーであった。（以上）

矢後和彦（商学学院）